



みんな手話の学校

08.05.25 掲載

ろう者の言葉が夢結ぶ

午前9時すぎ。登校してきた児童に、小野広祐(おの・こうすけ)先生(28)があいさつした。

「おはようございます」

「先生おはよう。あのね、この前なくした連絡帳ね……」

3年生の女の子が早口で告げた。いや、もし声に出すなら、きっとそう言ったのに違いない。

目の前では、花火がはじけるように手が動くだけだ。2人とも、生まれつき耳が聞こえない。東京都品川区にこの春開校した私立明晴(めいせい)学園は、みんなが手話でしゃべる日本初の学校だ。授業も職員会議も児童のおしゃべりも、すべて手話。小野さんたちの夢だった。



輪になって進む授業。手話で話す児童たちの間で小野さんが話しかける＝東京都品川区、鬼室黎撮影

小野さんは、音楽家の父のもとに生まれた。小学生の6年間、土曜になると「社会で生きていくために」と自宅で発声やピアノの練習をさせられた。いまも「エリーゼのために」がそらで弾ける。音がずれると半ズボンの足をたたかれた。でもどこを間違えたのか分からない。土曜が嫌いだった。

意外に知られていないが、ろう学校のほとんどは、手話で授業をしない。わずかな聴力と教師の口の形から話を推測させ、自分に聞こえない声で答えさせる。

「聴覚口話法」というこの方法で小野さんも学んだ。出席をとる時、担任はわざと口元を隠した。オノコースケ。あごが3回縦に動く。それが自分の番だった。「手話なんか使えばチンパンジーのようになる」と言われた。親や先生にほめてもらいたくて、ひたすら声を出した。

「でも本当は、言いたいことのいくらかも伝えられなかった。違う、苦しい、とっていました」

ろう者とは手話という言語を使う文化的少数者だ――誇らかに掲げた「ろう文化宣言」の著者、木村

- + 新聞ナビ
- + 新聞まとめ読み
- + ブログ「aサロン」
- + 投稿・わたしが主役
- + プレミアムコラム
- + 歩く・旅する
- + 暮らし
- + 観る・聴く
- + 本を読む
- + 医療・健康のとびら
- + 大人を楽しむ(ネクストエージ)
- + 学生お役立ち
- + アーカイブ



晴美さんの講演を見たのは、そんな時だった。「手話は、日本語とは文法も単語も異なる独立した言語なんです」。高校2年の小野さんにとって、話のすべてが新鮮だった。

風呂場の鏡で一人、手話を練習しはじめた。だが声も捨てきれない。声を出すことが、自分の全人生だったのだ。いったい自分は何者なのか。揺れていた。

8年ほど前、大学仲間と居酒屋で一杯やることになり、得意の口話で頼んだ。「生ビール中！」

店員が注文を運ぶ。その光景に目を丸くした。ジョッキが次々とテーブルに並べられていく。

「生ビール9」。店員には、そう聞こえたのだと分かった時、固まった。通じやしないんだ。決めた。自分はろう者として生きる。

◇

TBSディレクターだった斉藤道雄さん(61)は96年、「ろう文化宣言」の木村さんに会った。

ワシントン支局長だった93年、ろう者のための大学を見学し、カフェテリアで100人以上の手話が飛び交う光景に心が震えた。帰国後、日本の取材をし、「手話の世界」という番組を放送した。

その中で、静岡出身の赤堀仁美さん(35)が言う。両親も妹もろう者。生まれた時から手話で育った。「私はろう者となら、本当に深いところまで話ができるんですよ。聴者とでは無理なんです」

「何これ！」。TBSの番組を見て、岐阜県でろう学校の教師をしていた長谷部倫子さん(43)はのけぞった。「ろう」は差別語だと思っていたのに、番組の彼らは「自分たちは障害者じゃない。ろう者だ」と胸を張る。

赴任まで手話通訳を見たこともなかった。算数の授業なのに、足し算そっちのけで問題文の単語を発音させた。「これは教育なんだろうか」。学校を辞めて上京。その年の夏、東京都府中市で開かれた全国ろう学生懇談会で、司会者をしていた小野さんに会った。

手話という言葉に導かれた人の輪。ろう教育の改革を目指す者たちが次々と集まった。

99年、小野さんたちは、ろう児のためのフリースクール「龍の子学園」をつくった。小野さんは、親の反対を押し切ってIT関連会社を辞め、専従スタッフになった。収入は、ひとけた落ちた。

遊び盛りの年齢なのに、寝袋持参で狭い事務所に泊まり込んで、他人の子供のために教材をつくる。その熱心さに、親たちがうたれた。「一日も早く本当の学校にして、安定させてあげたい」

転機は思わぬところにあった。

05年、石原慎太郎都知事の講演で親の一人が、手話で教える学校を、と訴えた。知事が尋ねた。「手話は言語なのか。手話なら何でも話せるのか」。その通りだ。「ろう学校は手話を使っているのだと思っていた。申し訳ない」。07年3月、都が国に申請した「バイリンガルろう教育特区」の認定がおりた。

今年4月に開校して1カ月半。

校長席に斉藤さんがいる。教頭が長谷部さん。独自教科の「手話」担当は赤堀さん。そして小野さんは「日本語」担当だ。赤堀さんと小野さんは、教員免許の取得に向けて、まだ見習い中だ。

5月のある日。2時間目の授業は、花の絵と日本語表記を組み合わせる授業だった。

「指文字で表現してごらん」と小野さんが女の子に言った。

ア・ジ・サ・イ。

小指だけを立てる「イ」の字で、薬指がちよこんと上がってしまう。小野さんがそっと直した。

授業の終わりを告げる、チャイム代わりに緑ランプが点滅した。「ついたよ〜」。子供たちが小さな手で一斉に指さした。(谷津憲郎)